

II 調査結果の概要

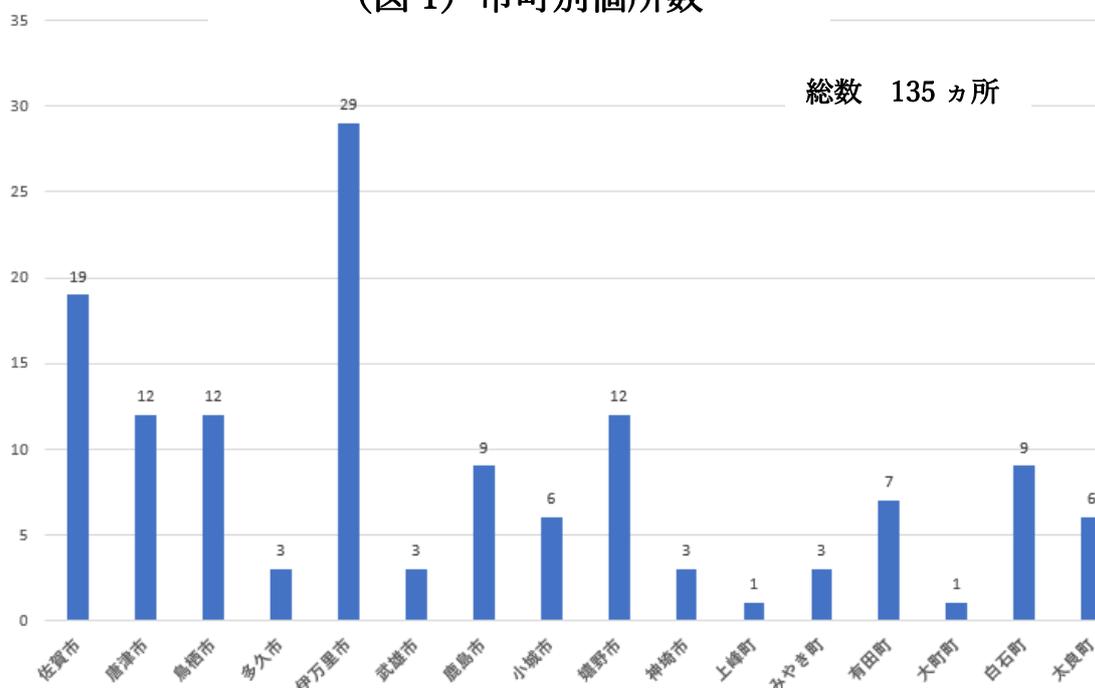
1, 市町別 (図1)

今回掲載した災害歴史遺産は、全体で 16 市町、135 カ所となっている。このほか、個所数には含まれないが掲載したものに関連があると思われるものについて、参考として県外も含めて 15 カ所を掲載している。

なお、同じ敷地内に複数の碑などがある場合、それぞれ一カ所として計上した。

市町別にみると、最も多いのは、伊万里市の 29 カ所である。次いで、佐賀市(19 カ所)、唐津市、鳥栖市、嬉野市(12 カ所)、鹿島市、白石町(9 カ所)などとなっている。なお、吉野ヶ里町、基山町、玄海町、江北町では確認できなかった。

(図1) 市町別個所数



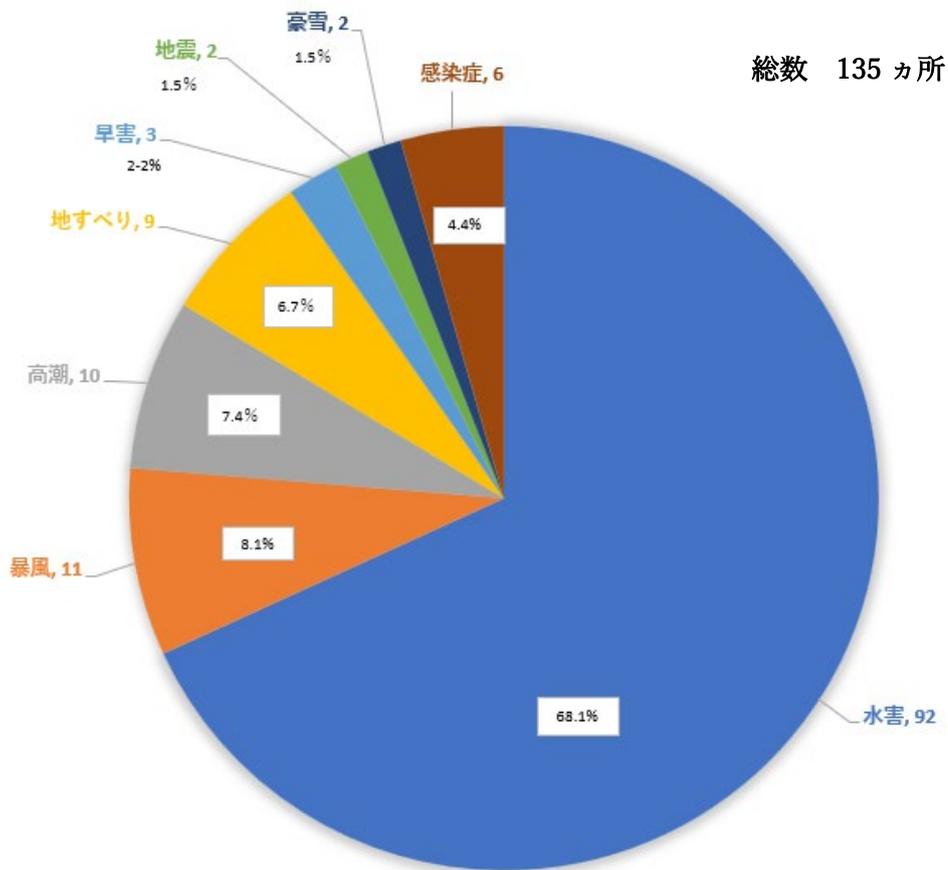
2, 災害別 (図2)

災害別では、水害が最も多く、135 カ所中、92 カ所(68.1%)、次いで、暴風 11 カ所(8.1%)、高潮 10 カ所(7.4%)、地すべり 9 カ所(6.7%)などとなっている。

なお、本書では、台風による災害については、その地域の災害特性を明らかにするため、水害、暴風、高潮など、発生した被害ごとに分類している。また、大雨に伴う土砂災害については、地すべりを除き水害に分類した。

今回は、水害との関連が深い日本住血吸虫病(感染症と表示)についても掲載した。内訳は、6 カ所(4.4%)となっている。

(図2) 災害別個所数



3. 災害別・市町別 (図3)

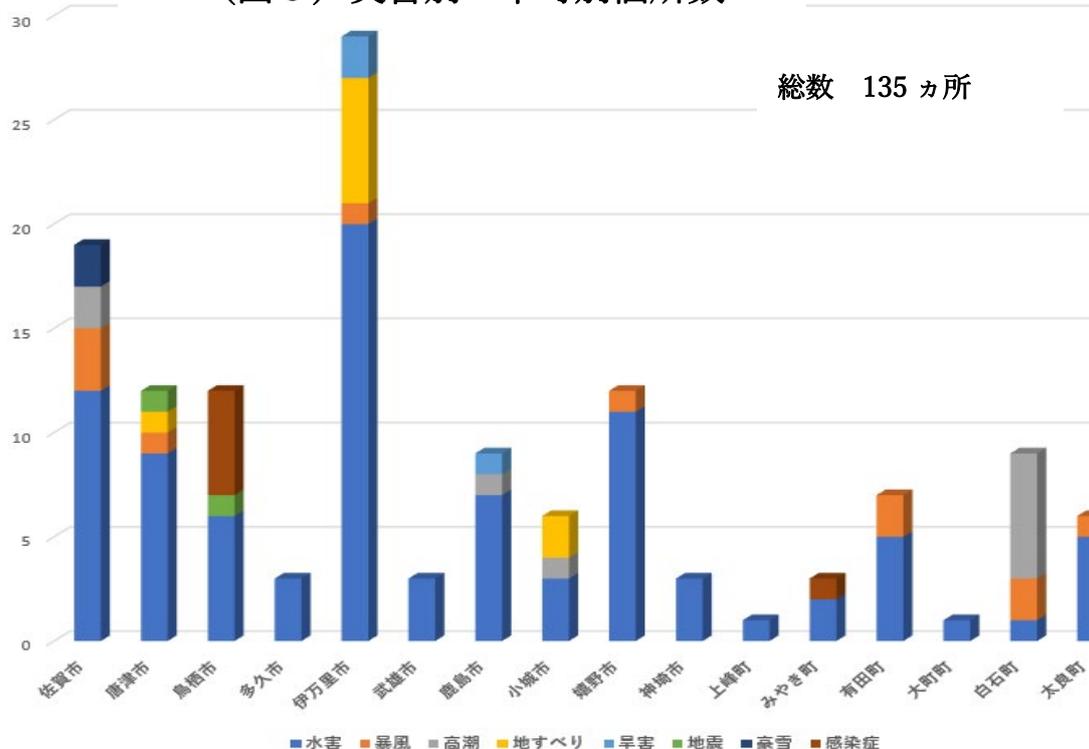
災害別、市町別にみると、最も多い水害に関しては、全体 92 カ所のうち、伊万里市が 20 カ所、次いで、佐賀市が 12 カ所、嬉野市が 11 カ所、唐津市が 9 カ所、鹿島市が 7 カ所、鳥栖市が 6 カ所などとなっている。水害については、掲載した 16 すべての市町に何らかの災害歴史遺産が分布している。

また、暴風については、全体で 11 カ所のうち、佐賀市 3 カ所、次いで、有田町、白石町がそれぞれ 2 カ所、唐津市、伊万里市、嬉野市、太良町がそれぞれ 1 カ所となっている。

高潮については全体で 10 カ所のうち、白石町が 6 カ所と大半を占め、佐賀市が 2 カ所、鹿島市と小城市がそれぞれ 1 カ所となっている。いずれも有明海の干拓地に分布している。

地すべりでは、全体で 9 カ所のうち、伊万里市が 6 カ所と大半を占めており、次いで小城市 2 カ所、唐津市 1 カ所となっている。

(図3) 災害別・市町別個所数



4. 災害発年代別 (図4)

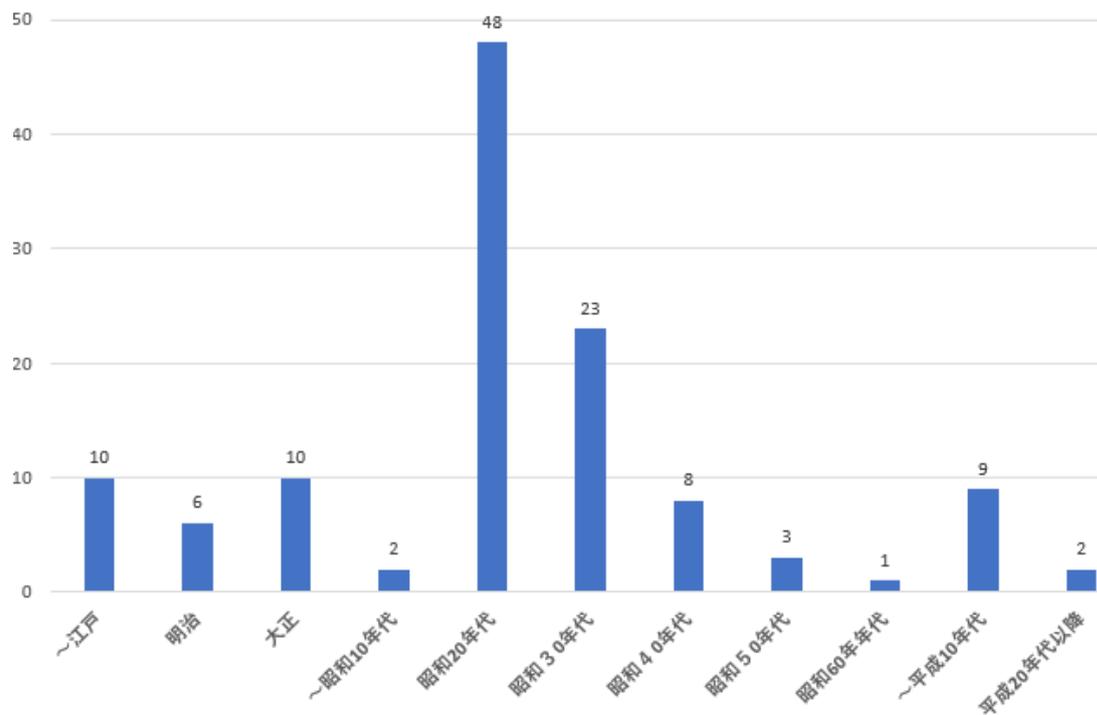
次に、感染症や災害発年代が不明のものを除き、年代のわかっている 122 ヲ所についてみると、最も多い災害発生は、昭和 20 年代(1945～1954)で 48 ヲ所、次いで昭和 30 年代(1955～1964)の 23 ヲ所、江戸時代以前と大正時代がそれぞれ 10 ヲ所となっている。

これを災害別にみると、最も多い水害では、昭和 20 年代が 45 ヲ所、次いで、昭和 30 年代が 15 ヲ所、昭和 40 年代が 7 ヲ所となっている。このほか地すべりでは昭和 30 年代 4 ヲ所、暴風が江戸時代 7 ヲ所、高潮が大正時代 8 ヲ所といずれも他の年代に比べ最も多くなっている。

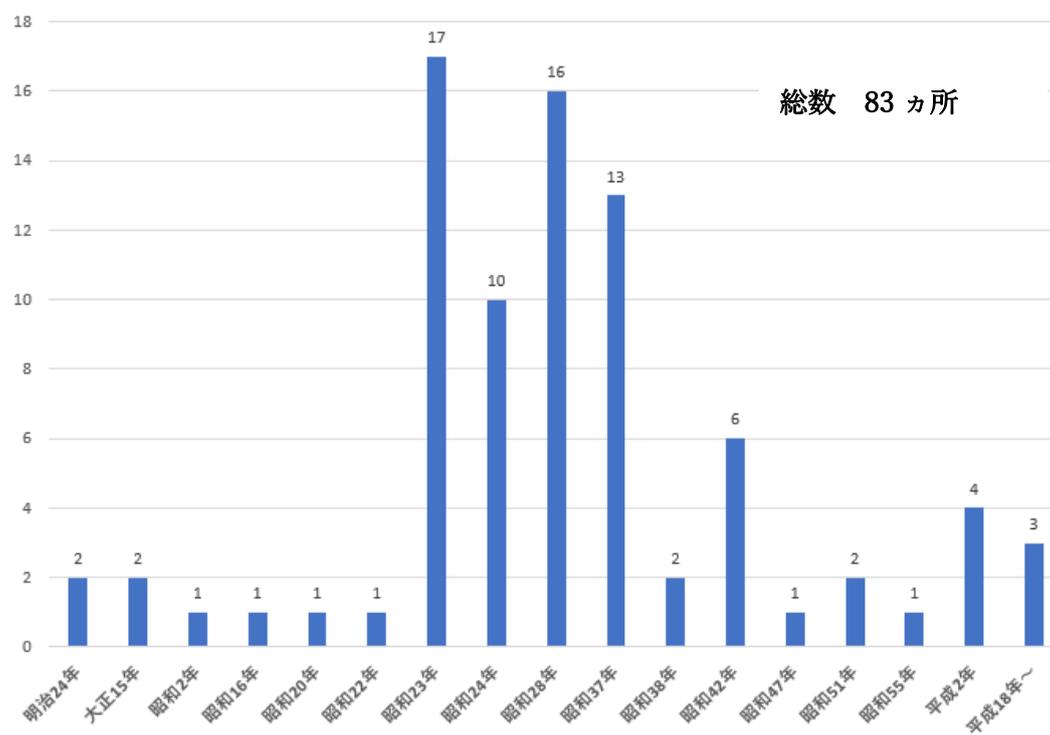
5. 近年の主な水害発年代別 (図5)

近年の主な水害に関し、発年代が明らかな 83 ヲ所について、年代別にみると、最も多いのが、昭和 23 年(1948)の水害で、3 市町、17 ヲ所、このうち伊万里市が 10 ヲ所と最も多く、有田町が 5 ヲ所、唐津市が 2 ヲ所となっている。次いで、昭和 28 年(1953)の水害が、9 市町、16 ヲ所で、唐津市 3 ヲ所、佐賀市、鳥栖市、多久市、伊万里市、神埼市がそれぞれ 2 ヲ所となっている。次いで、昭和 37 年(1962)の水害で、3 市町、13 ヲ所、このうち鹿島市と太良町がそれぞれ 5 ヲ所、嬉野市が 3 ヲ所となっている。なお、複数年の水害被害の記述がある碑については、最も近年の水害、または最も被害が大きかった水害の年代に分類している。

(図4) 災害発生年代別個所数 (感染症・年代不明のものを除く 122 ヲ所)



(図5) 近年の主な水害発生年代別個所数



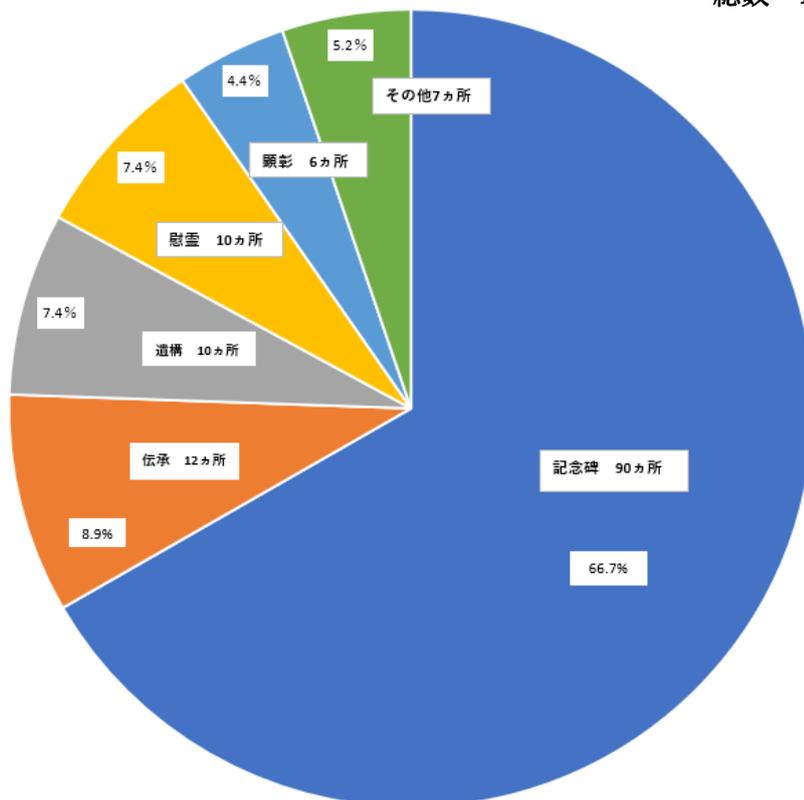
6, 目的別 (図6)

目的別でみると、全体の 135 カ所のうち、記念碑が 90 カ所と最も多く 66.7%を占めている。次いで、災害伝承に関するものが 12 カ所(8.9%)、遺構と慰霊がそれぞれ 10 カ所(7.4%)、顕彰が 6 カ所(4.4%)、その他が7カ所(5.2%)となっている。

これを災害別にみると、水害関係 92 カ所(全体の 68.1%)のうち、記念碑が 72 カ所、その他 7カ所、遺構と慰霊とが 4カ所、伝承 3カ所、顕彰が 2カ所となっている。暴風関係 11 カ所(8.1%)については、伝承と遺構がそれぞれ 4カ所、記念碑が 2カ所、慰霊が 1カ所となっている。また、高潮関係 10カ所(7.4%)については、記念碑が 7カ所、伝承が 2カ所、顕彰が 1カ所となっている。また、地すべり関係 9カ所(6.7%)のうち、慰霊が 4カ所、記念碑が 3カ所、伝承と顕彰が1カ所となっている。

(図6) 目的別個所数

総数 135 カ所



7, 感染症(日本住血吸虫病)関係

日本住血吸虫病に関するものについて、全体で 6 カ所のうち、鳥栖市が 5 カ所、みやき町が 1 カ所となっており、いずれも筑後川流域である。なお、それらの位置図については別項に掲載しているので参考にされたい。

8. まとめ

本稿で取り上げた災害歴史遺産の個所数については、碑や遺構等の数であって、災害の発生件数の多寡ではないということに留意しなければならない。

水害常襲地帯といわれるところであっても、碑等がほとんど見当たらない地域がある一方、災害復旧記念碑や慰霊碑などがある地域によっては、これまで、特に災害がなかった地域に思わぬ大災害が発生したということをおかしくさせるものも見受けられる。例えば、碑文に「未曾有の・・・」「前代未聞の・・・」「空前絶後の・・・」などと記されている場合などである。

調査した範囲で見ると、佐賀県に残されている災害歴史遺産は、前線や台風による水害に関するものが大半を占めている。そうしたことから掲載したすべての市町に水害に関するものが分布している。そのほか、暴風や高潮など台風に関係するものも多くなっている。特に、高潮に関するものは有明海沿岸の干拓地にみられ、唐津・伊万里方面ではみられなかった。有明海沿岸は歴史的にも高潮被害を受けやすい地域であることを示している。

このほか、地すべりでは、伊万里地域に多く見られ、これは、北松地すべり地帯と呼ばれる地すべり多発地帯に属していることが要因だと考えられる。また、本県では殆んど起こらないと思われてきた豪雪や地震によるものがあった。

碑等に記された水害の発生年代を見ると、昭和 20 年代が最も多くなっている。これは、枕崎台風やジュディス台風、昭和 23 年や 28 年の水害など大きな災害が相次いで発生していることが要因だが、戦後まもなくということもあり、国土が荒廃し、河川改修など防災対策が十分でなかったことも、災害の多発に繋がった一因ではないかと思われる。

今回、感染症として取り上げた日本住血吸虫病は、かつては原因不明の地方病、風土病などと呼ばれ、山梨県の甲府盆地や広島県の片山地方、筑後川流域に古くから発生していた。

大正 2 年、九州帝国大学医学部の宮入敬之助氏らにより、その中間宿主であるミヤイリ貝が佐賀県鳥栖市で発見され、その後、ミヤイリ貝撲滅が日本住血吸虫病の重点対策となり、薬剤の散布、河川の改修、湿地帯における排水不良の改善、水路のコンクリート化などの対策が進められ、こうした事業を記念する碑などが佐賀県、福岡県の筑後川流域の各地に建てられている。官民あげての取り組みの結果、平成 2 年、「筑後川流域宮入貝撲滅対策連絡協議会」が日本住血吸虫病の安全宣言を発表した。

日本住血吸虫病とその撲滅の歴史は、水害常襲地帯といわれた筑後川流域の災害の歴史を知るうえで欠かせない事例であり、その貴重な証言を今に伝えている碑を今回特に取り上げた。